

佐々木 政子  
東海大学 名誉教授



## 「女性研究者のキャリアパスのつくりかた」

### 講演概要

日本化学会の若手会員なら研究者のキャリアパスのつくりかたに「男女差は無いはず」と考えるに違いない。しかし、このテーマを頂いた。意味を簡単に説明しよう。資源小国日本が世界の中で持続発展するための鍵は“科学技術立国”実現であり、日本の未来を拓く科学者、理工系研究者・技術者が希求されている。しかし、文系天国の日本では、世界に類を見ない戦後復興を果たし、高度成長を支えた理工系人材は、優遇されてこず、さらに流浪するポストク問題まで具現化している。加えて、女性研究者があらゆる研究分野で活躍しようとする場合に、男性にはない大障壁が待ち構えている。女性が“出産”というライフイベントを迎えた時点で、男性研究者とは大きく異なる立場になるのが日本の現状である。“出産”は、持続可能社会の切り札“次世代を創りだすこと”であるにも拘らず、それまでの研究者としての活動を、休止あるいは再考せざるを得ない状況が発生する。子どもは、誰にもまねることのできない創造物であり、その育成に代替・再生はない。

一方、日本を多様性に富む活力ある社会にするためには、女性研究者の活躍が必須である。少子高齢化と団塊世代の引退により、労働人口は急激な減少傾向にある。研究者層も、しかりである。科学技術分野に限らず男女共同参画は日本の命題となり、大学を含む公共事業体で女性研究者支援策(出産・育児・介護等)が次々と提案され、実行に移されつつある。しかし、日本の全研究者に占める女性比率は先進国中最下位にあり、女性研究者が社会で活躍するための要件はいまだに整っていない。男性は仕事、女性は家庭という社会通念が払拭されないままなのである。

本講演では、全女性研究者がその生命を真っ当しつつ、研究での自己実現をどう可能とするかの1つの指針を提供できればと考えている。女性研究者のキャリアパスは時代の影響を大きく受ける。しかし、昨年の「四人の日本人、ノーベル賞受賞」のニュースは、知的好奇心と探求心が科学・技術展開の原点であることを明示した。女性研究者のキャリアパスは、夢と目的意識と共に学び・研究することから始まり、博士号取得後は地位を得て経済的に自立した専門家として余裕を持って活躍し、最終的に研究成果を享受しつつ社会貢献に繋げることであろう。

### 講演者略歴

1961年東京理科大学理学部化学科卒業、同年東京大学生産技術研究所入所。文部技官・助手を経て、1975年東海大学情報技術センター専任講師。1976年東京大学工学博士。1978年東海大学開発技術研究所助教授。同教授・同大学総合科学技術研究所教授・所長付を経て、2008年同大学名誉教授。日本光生物学協会会長、日本女性科学者の会会長などを歴任。現在、日本化学会男女共同参画推進委員会委員長など。